

Study of Buddha Footprint Waka Inscription in Yakushi-ji Temple I : About the Sho and its Contents Engraved on the Upper Half of the Monument

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 裕之, 漆原, 徹, 遠藤, 祐介 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1417

薬師寺・佛足跡歌碑の研究Ⅰ

— 碑面上半部に刻された書とその内容について —

Study of Buddha Footprint Waka Inscription in
Yakushi-ji Temple I:
About the *Sho* and its Contents Engraved on the Upper
Half of the Monument

廣瀬裕之*

HIROSE Hiroyuki

漆原徹†

URUSHIHARA Toru

遠藤祐介††

ENDO Yusuke

一、はじめに

本研究は、「中国仏教の日本への受容」をテーマとして「しあわせ研究」の調査を続行する中で、天平勝宝五年（七五三）刻の日本最古の「佛足石」に刻された銘文の書とその背景について、書道学（廣瀬）・歴史学（漆原）・仏教学（遠藤）から論考し、次の三つの研究を共同で進め発表してきた。

- ① 「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究―正面銘文として刻された書―」 『武蔵野教育学論集』 第四号所収（二〇一八年三月発行）
- ② 「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究Ⅱ―左側面銘文刻とその成立過程―」 『武蔵野教育学論集』 第六号所収（二〇一九年三月発行）

- ③ 「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究Ⅲ―背面銘文刻と成立過程及びその後の影響について―」

『武蔵野教育学論集』 第八号所収（二〇二〇年三月発行）

すでに発表したこれら佛足石銘文に関する研究を基とし、今回からは、同じく奈良時代に建碑され、そのすぐ隣に現存する「佛足跡歌碑」に注目し、ここに刻された銘文の研究を進めることとした。

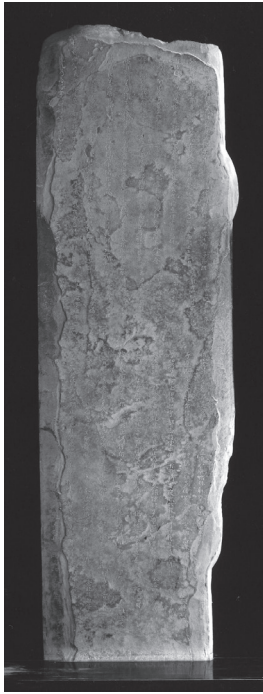
本稿では、万葉仮名で記された佛足跡歌碑銘文の書を飛鳥園撮影の精彩な薬師寺所蔵の拓影と、令和二年十一月二十六日夕刻から立ち合いのもとで行なった原碑の碑面調査を基として摩滅前の刻の文字の姿を明らかにしてできるだけ忠実に復元することを試みた。そして、仏教学の面から銘文内容の考察を加え、本文、現代語訳、注

釈を提示した。

また、奈良時代以後、佛足石の存在は、従来の研究では空白期を迎え、その後江戸時代になると佛足石がまた盛んに造られるようになるのだが、その空白の期間（中世）のその存在を埋める佛足石の存在について探るべく、私たちはこの調査を引き続きあわせて行い、今回も新しい成果を収めることができたのでここに記す。

二、佛足跡歌碑の書とついでにの復元

佛足跡歌碑銘文についての先行研究では、廣岡義隆氏による「佛足石記佛足跡歌碑本文影復元」『三重大学日本語学文字 第一巻』所収一九九〇及び、『佛足石記佛足跡歌碑歌研究』（和泉書院、二〇一五）がある。これらの研究を参考にしつつ、今回、原刻および、葉師寺の許可による飛鳥園撮影の写真「令和二年十月八日付・許可第一三〇一」によって考証を加え、書としてできるだけ忠実に復元してみたものが次の図版である。佛足石銘文の書と比較すると、緻密な粘板岩質の石に細線で刻されたこの歌碑の方が一部分を除



▼写真1 佛足跡歌碑 正面全体 【飛鳥園撮影】



▼写真2 原刻部分

（257行目冒頭部）【飛鳥園撮影】

き、刻された文字がおおむね明瞭に見える。しかし、この石の石質の特徴というか欠点とでもいえる表面の薄い剥離が見られる。剥離された面にも文字が刻された所が見られることも特色といえよう。今回はこの碑の上半分の書の復元を試みた。図版一行目の「鼻」字の下部に見られるような、佛足石銘文によく見られた六朝時代と同一の字形もみられる。書風については六朝風というよりは、文字の

大きさが小さいこ

とによるためか古墳時代出土の鉄剣銘の刻と似ている。できるだけ摩滅前の正確な文字の姿を再現することを目指し、特に文字の刻線及び線質そのものを正しく再現することに努めたが、後世の損傷・剥落したところや、傷か刻線か不明なところは、現状のままにした。

▼図版 佛足跡歌碑（上半部）の原拓と書の復元

1行目

美阿止都久留伊志乃比卑伎波阿米尔伊多利都知佐

美阿止都久留伊志乃比卑伎波阿米尔伊多利都知佐

阿由須礼知と波と賀多米尔
毛吕比止乃多米尔

阿由須礼知と波と賀多米尔
毛吕比止乃多米尔

2行目

弥穰知阿麻利布多都乃加多知夜穰文佐等曾太

弥穰知阿麻利布多都乃加多知夜穰文佐等曾太

礼留比止乃布美志阿止と巴吕
麻礼尔母阿留可毛。

礼留比止乃布美志阿止と巴吕
麻礼尔母阿留可毛。

3行目

与伎比止乃麻佐米尔美祁牟美阿止須良乎和礼波衣

与伎比止乃麻佐米尔美祁牟美阿止須良乎和礼波衣

美須旦伊波尔惠利都久
多麻尔惠利都久

美須旦伊波尔惠利都久
多麻尔惠利都久

4行目

已乃美阿止夜与日豆比賀利乎波奈知伊太志毛日毛
已乃美阿止夜与日豆比賀利乎波奈知伊太志毛日毛

日須久比和多志多麻波奈
須久比多麻波奈

日須久比和多志多麻波奈
須久比多麻波奈

5行目

伊可奈留夜比止尔伊麻世可伊波乃宇閑子都知止布

伊可奈留夜比止尔伊麻世可伊波乃宇閑子都知止布

美奈志向止乃祁留良年 多布刀久毛向留可

美奈志向止乃祁留良年 多布刀久毛向留可

6行目

麻須良乎乃須て美依岐多知布賣留向止乎美都

麻須良乎乃須て美依岐多知布賣留向止乎美都

志乃波年多太尔向布麻是尔 麻禁向布麻是尔

志乃波年多太尔向布麻是尔 麻禁向布麻是尔

7行目

麻須良乎乃布義於智留向止波伊波乃字閉尔伊麻

毛乃已礼利美都志乃霜止

奈賀久志乃霜止

毛乃已礼利美都志乃霜止

奈賀久志乃霜止

8行目

巴乃美阿止乎多豆祢毛止米且与鼓比止乃伊麻須

巴乃美阿止乎多豆祢毛止米且与鼓比止乃伊麻須

久尔之波和礼毛麻胃且乎

毛吕毛吕乎為且

久尔之波和礼毛麻胃且乎

毛吕毛吕乎為且

9行目

十七首合加乃美阿止伊波尔宇都志於伎宇夜麻比与乃知乃

十七首合加乃美阿止伊波尔宇都志於伎宇夜麻比与乃知乃

保止氣尔由豆利麻都良牟 佐ノ義麻宇佐牟

保止氣尔由豆利麻都良牟 佐ノ義麻宇佐牟

10行目

已礼乃与伎宇都利佐留止毛止已止婆尔佐乃已利

已礼乃与伎宇都利佐留止毛止已止婆尔佐乃已利

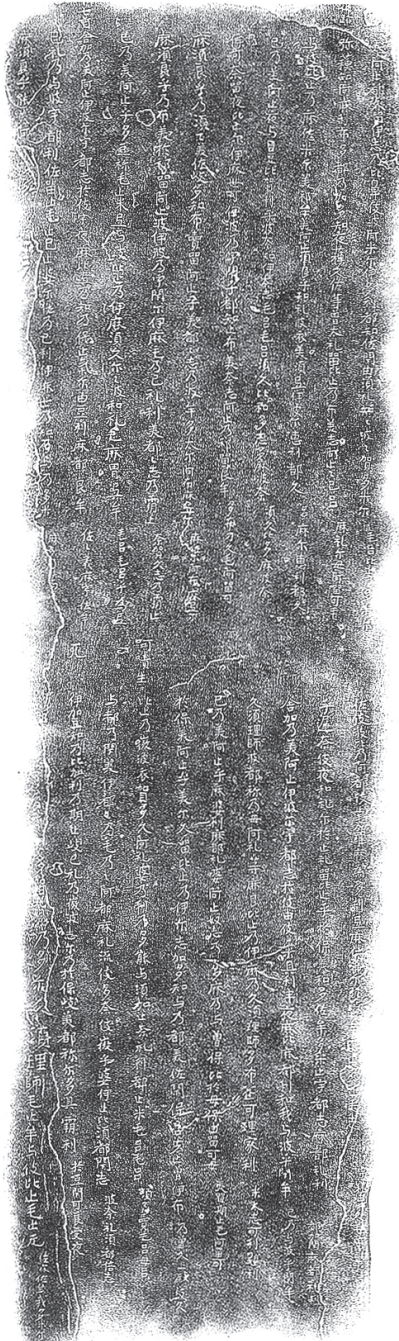
伊麻世乃知乃与乃多米 麻多与

伊麻世乃知乃与乃多米 麻多与

11行目



全拓



三、佛足跡歌と観佛三昧海経

釈尊の足裏を刻んだ佛足石を崇拜する信仰（以下、佛足石信仰）は、釈迦信仰の一形態として理解される。薬師寺佛足石に刻まれた銘文は、その記載の正当性の根拠となる経典（経証）として『観佛三昧海経』を提示しており、奈良時代における佛足石信仰の様相を復元するためには、この経典を媒介として、薬師寺佛足石と薬師寺佛足跡歌碑^①にある二十一首の佛足跡歌との内容的な関連性を考察することが重要だと考えられる。

奈良時代の日本仏教が唐代初期の中国仏教から強い影響を受けたことは周知の事実であるが、薬師寺の佛足石信仰における初唐の仏教の影響と言えば、『観佛三昧海経』を佛足石信仰の経証としたことのほかにも、玄奘の『大唐西域記』に見える佛足に対する信仰（以下、佛足信仰）をはじめとする釈迦信仰が佛足石信仰の根源にあることが指摘される^②。また玄奘と関わりの深い道宣^③の著書『釈迦氏譜』の中から、『観佛三昧海経』関連の釈迦信仰を読み取ることができ、そのため、これも佛足石信仰のルーツを探るための資料として活用できるであろう。

本稿では佛足跡歌にある『観佛三昧海経』関連の内容と、『釈迦氏譜』から看取される初唐における『観佛三昧海経』関連の釈迦信仰との関係性を考察し、薬師寺佛足石に代表される奈良時代の佛足石信仰の復元を目指すこととする。なお、今回は二十一首の佛足跡歌のうち、1番歌から11番歌までの本文・読み・意識を提示し、残りのは次の機会に考察することとしたい。

四、佛足石と佛足跡歌碑

奈良時代の成立とされる佛足跡歌碑^④は、薬師寺佛足石をもとに制作されたとする説のほかにも、薬師寺佛足石以外の佛足石をもとに制作された後に薬師寺に安置されたとする説もあるが、いずれにせよ佛足跡歌碑が成立した経緯は定かではない^⑤。そのため薬師寺佛足石と佛足跡歌碑を関連づけて研究する際には、一定の慎重さが必要とされる。

薬師寺佛足石銘文において、『観佛三昧海経』を経証として佛足および佛足石に言及する記載は次の三つである^⑥。

① 『観佛三昧海経』全体の概説として引用した記載

観佛三昧経に「若し人佛足石を見て内心に敬重せば、無量の衆罪此れに由りて滅す」とあり。

② 『観佛三昧海経』巻六、観四威儀品から引用した記載

観佛三昧経に「仏世に在し時、若し衆生有りて、仏の行くを見る者あり、千輻輪相を見るに及んでは即ち千劫の極重悪罪を除かる。仏世を去りし後、仏の行くを想う者もまた千劫の極重悪業を除かる。行くを想わずと雖も、仏迹を見る者と像の行くを見る者は、歩歩の中にまた千劫の極重悪業を除かる」

③ 『観佛三昧海経』巻一、序観地品から引用した記載

「如来の足下は平満にして一毛をも容れず、足下の千輻輪相は鞞鞞具足し、魚鱗相は金剛杵相に次び、足跟にまた梵王頂相有り、衆蟲の相あるを觀れば、諸惡に遇わず」

奈良時代の佛足石は初唐における釈迦信仰に基づくもので、『観佛三昧海経』を経証として制作されたと想定される。したがって、

仮に佛足跡歌碑が薬師寺以外の佛足石を見て制作されたものだとしても、『観佛三味海経』の記載を媒介として、薬師寺佛足石と佛足跡歌碑を関連付けて論ずることに躊躇する必要はないものと判断される。佛足跡歌碑を研究する場合、佛足石銘文にある『観佛三味海経』の記載はもとより、奈良時代の仏教信者が読んでいた『観佛三味海経』に記載される各種の逸話も視野に入れて、佛足石信仰の背景となる世界観を復元すべきであろう。

五、『観佛三味海経』と佛足信仰

『観佛三味海経』において、佛足の特徴の一つとされる千幅輪相に関連する話は、前節で提示した巻一序観地品、巻六観四威儀品のほかに巻三と巻四の観相品からも確認される。その中でも佛足石銘文で引用された観四威儀品の内容が玄奘の釈迦信仰の重要な要素の一つであることから、これを手掛かりとして初唐における佛足信仰の具体像を探ることとしたい。

玄奘は貞観一九年（六四五）にインドから帰朝した際に、七軀の釈迦像を將來した。七軀の釈迦像をめぐっては肥田路美氏が詳しい研究をしている。七軀のうちで『大唐西域記』と『大慈恩寺三蔵法師伝』において三番目に挙げられているのが優填王梅檀釈迦像であり、この釈迦像は『観佛三味海経』巻六、観四威儀品と関連して信仰されていたようである。

道宣撰『釈迦氏譜』巻一、優填造釈迦梅檀像縁（大正五〇、九七中）に、

観佛三味云。優填鑄金為像。仏従天下。戴像來迎為仏作礼。仏

言汝於來世大作仏事。我諸弟子咸付囑汝。空中化仏言。若有造仏形像供養。必得念仏清淨三昧。

とあり、木製の梅檀釈迦像の話の項目において、切利天に行った釈尊を慕って、優填王が仏像を鑄造し、王はこの像と一緒に、閻浮提に戻って来る釈尊を迎えたという『観佛三味海経』観四威儀品の話を引用している。

道宣は南斉代の僧祐撰『釈迦譜』をもとに『釈迦氏譜』を著しているが、『釈迦譜』巻三、優填王造釈迦梅檀像記（大正五〇、六六下）は次のように『観佛三味海経』を更に詳しく引用している。

観佛三味経云。仏昇切利時優填王恋慕世尊。鑄金為像。聞仏当

下。象載金像來迎世尊。爾時金像從象上下。猶如生佛足歩虚空足下雨花。亦放光明來迎世尊。時鑄金像合掌叉手為仏作礼。

爾時世尊亦復長跪合掌。時虚空中百千化仏。亦皆合掌長跪向像。爾時世尊而語像言。汝於來世大作仏事。我滅度後我諸弟子。以付囑汝。空中化仏異口同音。咸作是言。若有衆生於仏滅後。造立形像種種供養。是人來世。必得念仏清淨三昧。

鑄造した金像は引用文の傍線部にあるように、生ける釈尊のように虚空を歩み、その足下には花が降りそそがれたと記載されている。『観佛三味海経』観四威儀品（大正一五、六七五中）には「仏举足時、足下千幅輪相一一輪相皆雨八万四千衆宝蓮華」とあり、虚空を歩む釈尊の千幅輪相からは数多の宝蓮華が降りそそいだとされており、これが初唐の仏教信者が持つ佛足信仰の一つの形態であることが確認される。このような千幅輪相をはじめとする佛足信仰が、石に刻むという行為を介して具現化されたものが佛足石信仰であると理解される。

ここでもう一つ、玄奘将来の七軀の釈迦像と佛足石信仰の関連について紹介しておきたい。肥田氏は、七軀の釈迦像や經典類が大慈恩寺までパレードをしながら長安の人々にお披露目されたことについて、

玄奘の経像を送る行列のしつらえや莊嚴具のありさまは、北魏洛陽城で毎年仏誕の日に盛大に行なわれていた行像と、極めてよく似ているのである。如来の入滅後は、仏像の行くのを見る
ことが、生身の如来を目見するのと同等の功德になるという
『観佛三昧海経』威儀品等の所説が、行像の本義である。

と述べ、行像という点で七軀の釈迦像と『観佛三昧海経』観四威儀品が関連付けられていた可能性を指摘している。⁽⁸⁾

行像について『観佛三昧海経』観四威儀品(六七五下)に説かれる箇所とは

若有衆生、仏在世時見仏行者、歩歩之中見千輻輪相。除却千劫極重惡業。仏去世後、三昧正受想仏行者。亦除千劫極重惡業。雖不想行。見仏跡者見像行者。歩歩亦除千劫極重惡業。

であり、これはまさに薬師寺の佛足石銘文で引用している箇所である。ここでは虚空を歩む釈尊の姿を見る者、観想によって釈尊の歩みを見る者、仏の足跡を見る者、行像を見る者の千劫極重の悪罪や悪業が除かれると説かれており、行像に対する信仰と佛足信仰が重なっている様子が確認される。佛足石銘文を考察した拙論⁽⁹⁾においては、于闐国(『高僧法顕伝』巻一)、北魏の大同(『魏書』巻一一四釈老志)、屈志国(『大唐西域記』巻二)の行像を例に挙げたが、初唐における行像が『観佛三昧海経』と関連付けられたという肥田氏の見解は妥当であると考えられる。

六、佛足跡歌碑の1番歌から11番歌について

前節において、初唐における佛足および佛足石に対する信仰と薬師寺佛足石信仰の関連について考察してきた。本節では、佛足跡歌碑の1番歌から11番歌が『観佛三昧海経』の影響を受けていることを想定して、「本文、読み、意訳」を提示することとする。12番歌から21番歌の「本文、読み、意訳」と、『観佛三昧海経』の影響が顕著に看取される佛足跡歌についての考察は、稿をあらためて行うこととしたい。なお「本文、読み、意訳」は、読みやすさを優先して常用漢字を使い、現代仮名遣いを使用して記載する。

【1番歌】・・・図版第1行目

(本文) 美阿止都久留 伊志乃比鼻伎波 阿米尔伊多利 都知佐間
由須礼 知々波々賀多米尔 毛吕比止乃多米尔
(読み) みあとつくる いしのひびきは あめにいたり つちさへ
ゆすれ ちちははがために もろひとのために
(意訳) 釈尊の足跡を石に刻む音が天地に響き渡り、佛足石の功德によって父母やすべての人々が御仏に救われますように。

【2番歌】・・・図版第2行目

(本文) 弥蘇知阿麻利 布多都乃加多知 夜蘇久佐等 曾太礼留比
止乃 布美志阿止々己呂 麻礼尔母阿留可毛
(読み) みそちあまり ふたつのかたち やそくさと そだれるひ
との ふみしあところ まれにもあるかも
(意訳) 釈尊のお姿には三十二相八十種好というみごとな特徴が備わっているが、足跡から釈尊の足裏の相を拜見できるとは

何とも有難いことだ。

【3番歌】・・・図版第3行目

(本文) 与伎比止乃 麻佐米尔美祁牟 美阿止須良乎 和礼波衣美

須弓 伊波尔惠利都久 多麻尔惠利都久

(読み) よきひとの まさめにみけむ みあとすらを われはえみ
ずて いはにえりつく たまにえりつく

(意識) 釈尊の足跡を直接この目で拝見することはできないが、日本に伝来した足跡を石に刻んで釈尊の御徳をしのびたいものだ。

【4番歌】・・・図版第4行目

(本文) 己乃美阿止 夜与呂豆比賀利乎 波奈知伊太志 毛呂毛呂

須久比 和多志多麻波奈 須久比多麻波奈

(読み) このみあと やよろづひかりを はなちいだし もろもろ
すくひ わたしたまはな すくひたまはな

(意識) 石に刻まれた釈尊の足跡が八万の光を放ち、すべての人々を救い、苦しみのない彼岸にお渡し下さいますように。

【5番歌】・・・図版第5行目

(本文) 伊可奈留夜 比止尔伊麻世可 伊波乃宇閑乎 都知止布美

奈志 阿止乃祁留良牟 多布刀久毛阿留可

(読み) いかなるや ひとにいませか いはのうへを つちとふみ
なし あとのけるらむ たふとくもあるか

(意識) 釈尊は常の方ではないので、(薬師寺佛足石銘文にあるよ

うに) 固い石を踏んでも土を踏むかのように足跡を残しておられる。何とも尊いことだ。

【6番歌】・・・図版第6行目

(本文) 麻須良乎乃 須々美佐岐多知 布壳留阿止乎 美都々志乃

波牟 多太尔阿布麻弓尔 麻佐尔阿布麻弓尔

(読み) ますらをの すすみさきたち ふめるあとを みつつしの
はむ ただにあふまでに まさにあふまでに

(意識) 釈尊が先に立って進み残された足跡を見て、釈尊の御徳をしのぶ。仏にお目にかかりお救いいただく時までには、この足跡が大切なよすがとなるのだ。

【7番歌】・・・図版第7行目

(本文) 麻須良乎乃 布美於祁留阿止波 伊波乃宇閑尔 伊麻毛乃

己礼利 美都々志乃覇止 奈賀久志乃覇止

(読み) ますらをの ふみおけるあとは いはのうへに いまもの
これり みつつしのへと ながくしのへと

(意識) 釈尊の足跡は今や石に刻み込まれている。人々が佛足石を拝見して釈尊の御徳をしのび、いつまでも救いのよすがとなりますように。

【8番歌】・・・図版第8行目

(本文) 己乃美阿止乎 多豆祢毛止米弓 与岐比止乃 伊麻須久尔

々波 和礼毛麻胃弓牟 毛呂毛呂乎為弓

(読み) このみあとを たづねもとめて よきひとの いますくに

には われもまいてむ もろもろをいて
(意訳) 釈尊の足跡をたずね求めて佛足石を参拝し、すべての人々を引き連れて仏国土に参りたいものだ。

【9番歌】・・・図版第9行目

(本文) 舍加乃美阿止 伊波尔宇都志於伎 宇夜麻比互 乃知乃保
止气尔 由豆利麻都良牟 佐々義麻宇佐牟
(読み) さかのみあと いはにうつしおき うやまひて のちのほ
とけに ゆづりまつらむ ささげまうさむ

(意訳) 今の世では釈尊の足跡を石に刻んでうやまい、未来世に弥勒菩薩が仏になったら佛足石をささげたてまつることにしよう。

【10番歌】・・・図版第10行目

(本文) 己礼乃与波 宇都利佐留止毛 止己止婆尔 佐乃己利伊麻
世 乃知乃与乃多米 麻多乃与乃多米
(読み) これのよは うつりさるとも とことばに さのこりいま
せ のちのよのため またのよのため

(意訳) この世は生滅流転の無常の世であるが、石に刻まれた釈尊の足跡は後世のために末長く残ってもらいたいものだ。

【11番歌】・・・図版第11行目

(本文) 麻須良乎能 美阿止
(読み) ますらをの みあと
(意訳) 釈尊の足跡

七、新たな中世の佛足石の存在

二〇一七年の調査開始以来、本研究においていくつかの中世佛足石を発見して報告し、従来ほとんど存在しないと考えられてきた中世にも、佛足石が存在したことを明らかにすることができた。本報告では、今年度の調査探訪で京都安楽寺と銀閣寺に中世の佛足を見出すことができたので、あらたに中世佛足石の存在事例として加えたい。

京都安楽寺は、住蓮山安楽寺といい京都東山鹿ヶ谷にある浄土宗寺院である。開基は、法然の弟子住蓮上人と安楽上人の二人で、現在の寺域より東方1キロほどのところに「鹿ヶ谷草庵」を結んで浄土宗の布教の拠点としていたという。この安楽房と住蓮房は「建永の法難¹⁰⁾」で処刑された法然の弟子である。建永の法難で処刑された二人の上人の名前を取って流刑地から帰京した師の法然が住蓮山安楽寺として開基したと伝える。さらに寺伝によれば、後鳥羽上皇の二人の女官鈴虫姫と松虫姫が、上皇の熊野詣の留守に無断で出家したことに端を発したいわゆる建永の法難によって、二人の上人が斬刑に処せられ、法然や弟子であった親鸞らが流罪に処せられるに至ったとし、やがて流罪地から帰京した法然によって、住蓮山安楽寺として開山されたという。なお現在地に安楽寺本堂が再建されたのは天文年間(一五三二〜一五五五)のことであると安楽寺では伝えられている。

建永の法難は、安楽房・住蓮房の関わった後鳥羽院女官の自由出家の問題だけで惹起したわけではない。南都北嶺とよばれた興福寺

と延暦寺が、あいついで浄土宗批判の奏状によって専修念仏批判の動きを見せたことが事件の始まりであった。

元久元(一二〇四)年十月、延暦寺の学侶は、「延暦寺奏状」によって専修念仏の停止を皇族出身(以仁王の皇子)の天台座主真性に訴えた。次いで翌元久二(一二〇五)年には、興福寺から法然に訴えた。次いで翌元久二(一二〇五)年には、興福寺から法然に対して訴えがあり、「興福寺奏状」によって朝廷に対して専修念仏の停止を訴えるに至った。「興福寺奏状」の起草者は法相宗の僧貞慶¹²⁾であった。貞慶は、保元・平治の乱で知られている藤原通憲(信西)の孫である。このような南都北嶺の浄土宗批判の朝廷への働きかけという動きの中で、朝廷は多数の僧兵を擁する興福寺と延暦寺の要請を無視することができないという背景があったことは間違いないであろう。元久元(一二〇四)年に比叡山の衆徒の天台座主への奏状に対応して、法然は自戒の七箇条を示して師弟百九十名に連署させた『七箇条制戒』を天台座主に手交して融和を図ったが、さらに翌年貞慶から九か条の批判が提起されていたところに、安楽房と住蓮房の事件が起こったのだから、朝廷もついに念仏宗の弾圧にふみきることになったのだった。

このような状況で建永元(一二〇六)年十二月、後鳥羽院の熊野詣の出京中に、安楽房遵西と住蓮房が関与した後鳥羽院女官との不祥事が発覚して後鳥羽院の逆鱗に触れた。慈円の『愚管抄』にもこの事件のことは詳細に記述されており、寺伝で伝えている事実はあったと推定される。『愚管抄』の記事によれば、安楽房の説法を聞いた後鳥羽院の女官たちが後鳥羽院不在の御所中に安楽房たちを招き入れ、深夜に及んだのでそのまま泊めたとし、また出家したのもあったという。元は武士であった安楽房と住蓮房は大変な美

男で、善導の『六時礼讃』に曲節を付けて合唱することを考案して美声であったこともあり、女性信者にとりわけ人気があったとされている。しかも後鳥羽上皇の熊野詣の留守中に女官が数名鹿ヶ谷草庵の念仏会に参加して密通のうわさが広まった。また住蓮房と安楽房を導師として出家したのが安楽寺の寺伝によれば、十七歳の鈴虫姫と十九歳の松虫姫であると伝えるが、『愚管抄』にも女官の出家が記述されているので事実と認められる。

この事件を契機に朝廷も事態を重視し、年明けには法然門下の僧侶は次々と捕えられ、厳しい拷問を交えた取り調べの結果、二月には風紀を乱した張本と見られた安楽房を六条河原で斬罪とし、住蓮房も近江国馬淵で処刑された。師であった法然は土佐国、親鸞は越後国に遠流とされたが、源通親急死後、政界に復帰した九条兼実の庇護により、法然は九条家所領の讃岐国にとどめられた。後鳥羽上皇がいつごろから鎌倉幕府の軍事的打倒を考え始めたかは定かではないが、建永の少しあとの承元二(一二〇八)年ころから憤懣を表現する歌が目立ち始めることから幕府への憤懣が看取される。武力討幕を視野に入れておるとすれば、僧兵を擁する南都北嶺との協調に傾くのはやむを得なかったであろう。この事件について直接伝える史料は、次の太政官符の写しと『愚管抄』の記事である。法然の流罪を伝える太政官符は次のように記している。

太政官 土佐国司

流人藤井の元彦(源空 法然)

使左衛門の府生清原武次従二人

門部二人 従各一人

右、流人元彦を領送のために、くだんらの人をさして、発遣くたんのことし、國よろしく承知して、例によりて、これをこなへ、路次の國、またよろしく食柴具馬參正をたまふへし、符到奉行、

建永二年二月 右大史中原朝臣 判

左少辨藤原朝臣

〔法然上人行状畫圖三十三〕

この建永二年二月の法然流罪を土佐国司に伝達する太政官符によれば、法然は藤井元彦という俗名を付与され土佐へ遠流と決定されていたことがわかる。実際には讃岐国へ配流されたのだが、それは九条兼実が法然を師として出家した縁で、兼実が庇護したからに他ならない。兼実が法然を師として出家したことは、弟慈円の愚管抄にも記されている。

以上わずかな史料からも、安楽寺の寺伝という建永の法難と安楽房・住蓮房と二人の女官の出家との関係については、ほぼ史実を伝承していると思われる。自由出家した鳥羽院の女官鈴虫姫と松虫姫の名前については、史料にその名を見出すことはできないが、西園寺公衡の息女姉妹といい、その後長講堂領のひとつである瀬戸内海の生口島いぢまの光明坊で余生を送ったとして法名も伝えられている。そのモデルになった二人の存在は事実とみてよいであろう。法然は赦免された後、しばらく入洛を許されずに摂津勝尾寺にとどまっておられ、帰京が許されたのは、建暦元（一一二一）年十一月のことであった。その後、わずか二か月後の建暦二年一月二十五日には死去しているから、法然が「鹿ヶ谷草庵」を安楽寺として再建するこ

とができただかは俄かに判断できないが、時間的には難しかったのではないかと思われる。

さて建永の法難の経緯を述べたのは、今回中世佛足石の新たな発見が、慈照寺銀閣と鹿ヶ谷安楽寺境内に存在していたからである。一昨年の調査で最初に中世佛足石を見出したのは、その南北の中間に位置している法然院の境内にあった佛足石であることから、我々の調査で見出した中世佛足石では、東山の哲学の道の南北に連なるように少なくとも三つ存在していたことになる。まず写真3、慈照寺銀閣の庭内にある「洗月泉」の池中にあった従来それと全く気付かれることのなかった佛足石は、作庭当時から設置位置が動いてい

▼写真3 慈照寺銀閣洗月泉の佛足石



▼写真4 住蓮山安楽寺境内の佛足石



ないとすると、当初はその位置から見て、佛足石であることを認識して置かれたと思われる。佛足のつま先の方に立った参詣人が流れる水を背景とした佛足に向かって拝跪したのではないだろうか。

現在では池中に置かれてきたことから、流れ落ちる水の飛沫を浴びて苔むしており、佛足そのものも風化してそれと気づくこともなくなっているのが残念である。この佛足石は、銀閣寺作庭以前から境内地に存在していたものを、作庭時に泉池内に設置したものと考えられる。

次の写真4、住蓮山安楽寺境内の佛足石は、写真でも判別できる

ように右足かかとの部分が欠損している。しかしながら風化磨耗した佛足文様を、近世以降に補刻して白い顔料を入れて描きなおしていることがわかる。切欠き部分の仏の線刻はもう磨耗して目視で確認することは不可能な状態となっている。浄土宗の初期の布教の拠点であった東山の一带で三つの佛足石が発見できたのは偶然ではないと考えられる。浄土宗の布教は、法然と弟子たちの熱心な布教活動で当初から隆盛をみたが、南都北嶺からの厳しい反発を受け、法然自身すら流罪に処せられるといった弾圧を受けていることから、「鹿ヶ谷草庵」と称される布教活動のささやかな拠点に大伽藍が建設されていたはずもない。立派な仏像やそれを収める壮大な伽藍建築をはじめとする堂塔などは存在しない中で東山の山麓一带を中心とした浄土宗の初期布教活動に、佛足石が用いられていた可能性は十分に想定できるだろう。中世佛足石は、仏像や堂塔伽藍が整わない段階の布教のよりどころとして用いられていたという仮説は十分に可能性がありそうである。

八、結びにかえて

本研究は、武蔵野大学「しあわせ研究」の助成金を受け、「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続してきた。初期仏教の日本での展開の一形態として天平勝宝五（七五三）年の年紀を刻する国宝薬師寺佛足石を研究の基礎と位置づけ、その碑文の研究を中心として従来の先行研究を踏まえながら、新たな字句の翻刻と修正、またその意味するところを広く紹介するために新たに分かりやすく解釈した。また古代の薬師寺佛足石以外の佛足石について

は、従来近世以降のものしか存在しないという理解が一般的であったが、中世の佛足石が前回までの調査で京都法然院、安土城、泉南市林昌寺の三か所で確認され、粉河寺の佛足石も中世のものである可能性が高いことが明らかになった。今回の調査では京都の慈照寺銀閣と住蓮山安楽寺にも存在することが確認できた。

薬師寺佛足石・佛足跡歌碑の碑文についての本研究は、従来の研究蓄積をさらに前進させることができた。また中世佛足石の存在とその特徴の確認は、佛足石研究において、今後空白とみられていた中世佛足石の発見に資することができるようになった点で大きな成果といえるだろう。

今回は、薬師寺の国宝佛足跡歌碑銘文の調査研究を行うことができたが、精拓本と原刻の調査が欠かせない。所蔵者である薬師寺に深く感謝申し上げたい。また、奈良の薬師寺から特別許可を頂け、今回も大講堂内でじっくりと銘文を拝見しつつ調査させていただいたことが望外の幸せであった。奈良時代にはどのような銘文が書として刻されていたのか再現したいと考えて始めた研究だが、御協力のおかげでこの歌碑においてもその書美をわかる範囲で再現することができた。

今後も仏教を中心とした文化の研究を推し進めていきたいと考えている。

○本研究は、第一・二節を廣瀬、第七・八節を漆原、第三・四・五・六節を遠藤が執筆した。

○本研究は、武蔵野大学しあわせ研究所「令和二年度しあわせ研究費」採択による共同研究の成果である。

【註】

- (1) 「佛足石歌碑」と称されることもあるが、本稿では国宝指定名称の「佛足跡歌碑」と記す。
- (2) 廣瀬裕之・漆原徹・遠藤祐介「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（『武蔵野教育学論集』四（二〇一八年三月）・『武蔵野教育学論集』六（二〇一九年三月）・『武蔵野教育学論集』八（二〇二〇年三月）所収）の遠藤執筆担当の節を参照。
- (3) 『大正新脩大藏經』所収の文献を引用する際は、「大正」という略称の後に、巻数、頁数、段を記すこととする。『宋高僧伝』巻一四道宣伝に「及西明寺初就。詔宣充上座。三藏法師至止。詔与翻訳」（大正五〇、七九〇下）とあり、道宣は皇帝から尊重された学僧で、玄奘の翻訳を手伝ったという記録がある。なお光明皇后御願経の中に道宣撰『統高僧伝』が含まれており、奈良時代の日本でも道宣の名がよく知られていたことがうかがわれる。
- (4) 井上通泰『万葉集新考』第五（国民図書、一九二八年）二七四二頁には「歌碑を建てし事は記文に見えねど歌の意を推すに佛足石と同時に作りしなり」とあり、天平勝宝五年（七五三）に薬師寺で成立としている。新町徳之『上古文学選』（内外出版、一九二七年）四四一頁では「歌品や歌體から考へて、天平勝寶時代の作たることは疑ひあるまい」とし、井上説に近い見解である。鈴木暢幸『新修国文学史』上巻（隆文館、一九二六年）九二頁には「次に此等の歌は漢文字を表音的に用ゐて寫し出されて居る。萬葉集の中でも新しい歌はこれと同じ寫出法に依つて居るのを見れば、これは一般に奈良朝後期の風であつたと見える」としている。
- (5) 廣岡義隆『佛足石記佛足跡歌碑歌研究』（和泉書院、二〇一五年）四一八〜四二三頁を参照。
- (6) 前掲論文「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究」Ⅰの一三〇頁を参照。
- (7) 肥田路美『仏蹟仰慕と玄奘三蔵の将来仏像―七軀の釈迦像の意味をめぐる―』（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三分冊四八、二〇〇二年）を参照。
- (8) 肥田氏前掲論文、一六五・一六六頁から引用。パレードについては『大慈恩寺三

蔵法師伝』巻七を挙げ、北魏洛陽城の記載の根拠として、『洛陽伽藍記』巻一、長秋寺の条を提示している。

(9) 前掲論文「奈良・薬師寺の国宝・佛足石の研究」Iの一二八・一三〇頁を参照。

(10) 建永二年二月、法然以下弟子親鸞など七名を流罪。安楽房遵西を六条河原で斬首。ほか住蓮房、西意善禪房、性願房も処刑された浄土宗に対する弾圧事件。

(11) 後白河上皇の子以仁王の皇子。天台座主明雲慈円等に天台教学を学ぶ。建仁三(一一〇三)年天台座主。翌年大僧正。

(12) 藤原通憲(信西)の孫。父は信西の子貞憲。平治の乱で祖父信西が自殺し一門は没落、父貞憲は土佐国に遠流となり、貞慶は出家して興福寺に入り、法相教学を学ぶ。文治二(一一八六)年の大原勝林院で行われた法然と重源によって行われた大原問答に参加している。著書に『唯識論同学鈔』『法相心要鈔』『愚迷発心集』がある。

(13) 「法然上人行状畫圖三十三」

* 武蔵野大学教育学部

† 武蔵野大学文学部

†† 武蔵野大学グローバル学部